HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	ポライトネス理論をめぐる論争 ： 「合理主義的(rationalist)アプローチ」と「言説的(discursive)アプローチ」(承前)(退職記念)
著者	栗原，豪彦
引用	北海学園大学人文論集，42：85-126
発行日	2009-03-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

ポライトネス理論をめぐる論争――
「合理主義的（rationalist）アプローチ」と「言説的（discursive）アプローチ」（承前）

栗　原　豪　彦

4．「言説的アプローチ」について

前節では，1980-90 年代における事実上の「範型」となった B&L（1987）に対抗する代替理論を標榜する Eelen（2001）や Watts（1992/2005, 2003, etc.）に代表されるポストモダンの社会的モデルを志向する「言説的アプローチ」の輪郭を紹介したが，そこではこのテーマと論争の出発点である「ポライトネス（politeness）」という語のあいまい性，一般用法と理論用語の混同，科学的な厳密さの欠如などがまず問題にされたことをみた。Watts によると，これまでのポライトネス研究で閑却されていたのは，言語を形成し，その使用を左右してきた社会的，歴史的，および政治的条件を説明する作業だということになる。B&L（1987）に代表される合理主義的アプローチに共通するポライトネス（研究）観，すなわち CP と補完関係をなすものとしての方略的摩擦回避あるいはフェイス侵害緩和のための方略（の選択と使用）といったポライトネス観とフェイスや方略の普遍性の主張も，この視点からすれば，研究対象たるポライトネスがいかに定義されるべきかについて研究者間に合意がみられず，さらにその内容規定にも言語や文化による変異があることから，その普遍性を主張するのは「危険」で「無意味」だということになる（Watts 2003: xv, xxvii）。Watts によると，B&L（1987）は「強固な基盤をもつ包括的な理論であっても，フェイス侵害行為の緩和だけを扱っており，ポライトネスの理論というよりむしろ facework の理論である（Locher & Watts 2007: 10）」とみなされる。こ

うした観点から B&L のような「社会・人類学的な既定事実（socio-anthropological given）」としてのトップダウン型のモダニスト的，合理主義的ポライトネス観に代わり，研究対象をより厳密に規定するために，ポライトネスを「社会的相互作用の具体例から創発される」ものと捉えるのが妥当だとする（Watts et al. 2005: 12, Watts 2005: xvii）。既述の通り，B&L も「社会的相互作用というのはともにそれを生み出す個人（複数）の特徴を超越した創発的特性（emergent properties）の点で特筆すべきものである（B&L 1987: 48f）」と相互作用の社会的創発性に言及しているが，Watts らの立場はより徹底しているばかりでなく，人々の実践・慣習行動（practice）を一連の談話においてボトムアップ的にとらえるモデルを志向しているわけである。分析哲学と結びつく従来の語用論的アプローチにみられる個人性（individualism）や個人が特定の目標や意図を達成するために採用する方略（strategies）といった想定にもとづくモデルに代わる Watts らのポライトネス 1 のモデルは社会的慣習行動の理論の一環と位置づけられる（Watts 2003: 261）。本節では，「言説的アプローチ」に共通の基本的主張と依拠する社会理論の要点を再説しながら，グループを代表する Eelen，Watts，Mills の主張を概観して，それぞれの異同と主張の意義と妥当性を検討する。

4.2. Eelen（2001）のポライトネス観と社会理論

「合理主義的アプローチ」とこれに対抗する「「言説的アプローチ」の相違はつまるところそのポライトネス観が依拠する社会理論の違いによるといってもよい。ポライトネスを社会における「円滑なコミュニケーション」や「対立回避」，あるいは「均衡」といった機能とむすびつけるのは合理主義的アプローチに限らないが，こうした見方はポライトネスを社会的秩序を確立し維持するための社会の規制力，つまり社会の安定性を維持する要因とする見方につながる（Eelen 2001: 244）。Eelen によると，現行の主要なポライトネス理論の概念構築には「保守的」社会学者 Parsons 流の構造的機能主義（Parsonian Structural Functionalism）の社会モデルがデフォ

ルト的（自明の）社会理論になっているという（Eelen 2001: 188）[1]。

Parsons の社会的モデルは人間行動の理論で，人の現実の諸相をとらえる 4 つの「行動システム」からなるとみる。すなわち，(1)行動システム（肉体的，解剖学的特徴や肉体的要求），(2)人格システム（攻撃や愛情などの心理的側面），(3)社会システム（さまざまな一般性のレベルの集団・共同体（collectivity））及び(4)文化システム（価値観や信念などの人の相互作用における象徴的諸相）で，それぞれは相互に関連しながらも別個の性質をもつとする（Ibid. 188-9）。Parsons 的世界観は，個人が社会化する過程で身につける社会価値観や社会規範のシステムが個人の行動を決定する先験的規制要因になるとするが，主要なポライトネス理論はきわめて強い Parsons 流の社会的世界観と常識的なポライトネスの概念の表面的特徴にもとづいてモデル化されていると Eelen はみる（Ibid. 245）。その特徴は，ポライトネスというものを文化的に共有される社会規範の体系によって駆動され，社会的秩序と安定性を維持する社会的規制力を構成する（表現）行動の一形態としてとらえる点にあるという。ポライトネス研究の overviews の多くがさまざまな理論的アプローチの相違を強調する傾向があるが，異なってみえる理論も共通の存在論的，認識論的，方法論的前提という基層を共有しており，そうした共通の前提に照らすと，多様なモデルの差も多かれ少なかれ皮相的なものにすぎないとする（Ibid.）。こうした視点からは，「中核理論のあるものに基づく研究のほか，大部分の理論的修正や独立の代替的アプローチでさえも，ポライトネスの基本概念をある種の「共有規範」と関連する行動形式とみなす観点を共有する（Ibid. 245）」ことになる。

こうして，Eelen は「より均衡のとれた社会的世界観とよりきめ細かな認識論的かつヒューリスティックな（発見的方法をとる）立場にもとづく，従来とまったく異なる概念化こそが従来の社会言語学的思考の陥穽を避けることができ，ポライトネスという社会現象のこれまでとは異なる存在論的かつ機能的諸相をより深く理解できる（Ibid.）」という。

前節でもみたように，Eelen はこうして「ポライトネス」の概念を根本的

に見直すため，まず一般の人々（laymen）の想定や解釈による politeness1 と研究者が理論やモデルの議論で使う（メタ言語的な）概念としての politeness2 とを分け，前者こそ「ポライトネス研究でまず研究されるべき対象であり，科学的分析の入力（input）であり出発点（Eelen 2001: 25）」とする。一方の politeness2 について，Eelen は，他の社会科学が社会的現実（social reality）の把握，理解，説明をめざすのと同様に，「politeness2 は politeness1 の理論の形でポライトネスの社会現象を科学的に概念化することにかかわる（Ibid. 43f）」とする。つまり，politeness2 によって，politeness1 の作用やその機能，人々や社会一般に果たす役割を理解できるという。こうして politeness2 は politeness1 に関する理論であり，politeness1 で観察される現象―その仕組みや機能を「一歩離れた位置」から「説明」できるはずとみる（Ibid.）。この姿勢は，これまでのポライトネス研究が理論やモデルの構築に当たって設定した理論的概念を一般の人々の使う概念になんらの学問的手続きなしに一対一の対応関係があるものと想定して記述・説明に使っていることを問いただすものである（Eelen 2001: 78f）。なお，一般の人々が自他の（im）polite な言語行動に対する自発（無意識）的評価（つまり，研究者の質問などに答える場合の自他の（im）politeness に関する意識的な言明でない評価）を Eelen は「表現的・分類的 politeness1」とみなす（Ibid. 77f）。

言説的アプローチの生命線ともいえるこの区別に関して，Eelen は，Pike（1967: 37f）が言語と文化の研究に導入した 2 つのアプローチ，すなわち「イーミック（emic）」と「エティック（etic）」の区別を援用し，politeness1 を「イーミック」にきわめて近いものみなす一方，外部の観察者による内部のものの行動の説明（内部者には関係ない区別が含まれる）としての「エティック」的説明がかかわるレベルを politeness2 の概念に対応するものとしている（Ibid.: 77-8）。Eelen の論拠の要点は，研究の目的には一般の人たちの日常の言語行動が常に関与するため，研究努力には必然的にイーミックな次元があること，また専門家が人の行動を理解ないし説明する際には，素人の説明を超えるある種の余剰価値（surplus value）をもつため

に，科学的記述はエティック的範疇化や概念を伴うものであり，このためポライトネスの理論やモデルには emic/etic の両面があるというものである。ポライトネス研究のイーミックな側面には行為者の（無意識的な）弁別的社会的相互作用行動を解明する研究とともに（意識的な）常識的なポライトネスの概念の探求も含まれていることになる。ポライトネスという（言語）行動を研究対象とする社会言語学（及び語用論）の理論がイーミック的側面を研究しているつもりでも，エティック的な概念や範疇化を伴うことを示す例として，Eelen は，Distance, Deference and Camaraderie（Lakoff 1973, 1977），FTAs（B & L 1987），PP（Leech 1983, Gu 1990），CC（Fraser & Nolen 1981），Volition vs. Discernment（Ide 1982, 2006），cultural script（Blum-Kulka），emotive（Arndt & Janney 1991），politic behavior（Watts 2003）などをあげ，こうした議論における科学的記述や見解は一般の人びとの概念にはない概念や範疇化を伴っているとする（Ibid. 78）。これとは逆に，エティックが再びイーミックになること，すなわち一般の人々の脳中にエティック的概念が与えられ，ポライトネスにかかわる日常の特徴的な行動や評価においてエティック的な概念に頼ることもあると指摘する（Ibid. 79）。

有用ではあるが，（Pike 自身も認めるように）問題もあるこの emic/etic の区別を保ち，なおかつ politeness1 をもとに politeness2（理論）を構築する方法とはいかなるものか。Eelen が勧めるのは，Parsons 的（客観主義的）社会理論に代わる Bourdieu（1991）の「慣習行動の理論（theory of practice）」にみられる洞察であり，とくに表面的な現象や直観のレベルを超えて，「構成の社会的法則（social laws of construction）」あるいは「社会的生成（social genesis）」の働きを重視することである。つまり，ポライトネスを常識的な社会的「対象」とみずに，ポライトネスを構成する社会的メカニズム（the social mechanisms of its construction），つまり個々人の間で，それゆえ個人によっても間主観的（intersubjectively）に創造され維持されるそのありようを考察する必要があるというのである（Ibid.: 246）。

後述の Watts や Mills と同様，Eelen のポライトネス理論の基盤は，こうした Bourdieu の社会理論，とくにその「ハビトゥス (habitus)」[2] や「性向 (disposition)」といった概念に鼓舞されたものであり，その主たる教義は（評価性を組みこむ）論争性（argumentativity)，歴史性（historicity）および言説性 (discursiveness) である (Ibid. 247)。とくに，habitus の「規制された即興性（regulated improvisation）（Bourdieu 1977: 78)」，つまり構造化された創造性と集団的個人性という主観性と客観性の二面性をもつ特徴を組みこむことで「聞き手の立場と評価の時機（evaluative moment）を十分に考慮する概念が得られる。つまり politeness も impoliteness も共に把握することができ，また社会と個人の関係のより動的で双方向的な見方ができるのであり，したがってポライトネスの性質に内在的な進化と変化とともに（変異性と創造性という 2 つの観点から）個人をも認知することができる（Eelen 2001: 247)」というわけである。

Eelen はさらに Bourdieu の社会理論の知見を言説心理学（discursive psychology）の手法と結びつける方法論を提案している。言説心理学は，認知心理学的アプローチと異なり，談話 (talk) を社会行動として扱う談話分析の一形態で，ethnomethodology や会話分析 (CA) の手法もとりこむ。心理学上の問題を人間の行動という観点からとらえ，人の慣習行動 (practice) を集中的に研究するものであり，社会的慣習行動としてのポライトネス理論の心理学的基盤を与えるものとして，Bourdieu の社会理論を補完できるというわけである（Eelen 2001: 236)。言説心理学の特徴のひとつは，思考と行動を対照させず，思考を（慣習）行動の一形態とみなすことである（Harré & Gillet 1994: 19, cited Eelen 2001: 236)。思考過程を行動と切り離さず，人の行動形式とみなすことから，(ポライトネスがかかわるはずの)「規範 (norms)」のような現象も脳中の「もの」や「存在物」(entities) と見ず，むしろそれ自体を社会的慣習行動 (social practice) とみる (Eelen 2001: 236)。こうした人の活動の実践を強調することで結果として社会的相互作用や談話を心理学の主題（素材）に組み込むことになる。これは，思考の基礎である概念は語で表現されるが，語はさまざまな作業を遂行す

る言語の中にあるものだから，という論理による。この見方では，「伝統的な規範の見方は逆転し，それはもはや人間行動の（外的）原因ではなく，むしろそれ自体が社会的慣習行動なのであって，それなりに社会的影響力や目的や動機をもつことになる（Ibid.）」。規範は本来論争的（argumentative）性質をもつ，と想定することで，言説的現象として，規範も社会的慣習行動と切り離せず，慣習行動の諸相において，とくにそれがどういう目標を達成するのかという観点からみてはじめて意味をもつことになるというわけである（Eelen 2003: 237）。Eelen によれば，言説的論議の手段としてのポライトネス（の規範）が人々に対して及ぼすもっとも明白な社会的効果は，ある振る舞いを（したがってその行為者を）非難したり，是認したりすることだという。こうした行為によって「行儀のよい（well-mannered）」とか「野暮な（uncouth）」などと「倫理的・社会的分類を行い，それが社会を倫理的観点から構造化し，ひいてはその社会における個人の倫理的・社会的位置を規定する（Ibid. 237）」という Bourdieu 的見方を示す。

伝統的なポライトネス研究のモデルとは大幅に異なるこうしたアプローチでもポライトネスは依然として「システム」とみられるため，このような観点もポライトネスの「モデル」と呼べると Eelen は主張する（Ibid. 248）。これまでのポライトネス理論が「(im)politeness 行動の産出」に焦点を当てたのに対して，Eelen のめざすモデルは「(im)politeness の評価の産出」を中心とすることが革新的だとする（Ibid. 249）。伝統的な研究課題である「なぜ人々は（im)polite なのか」という問いが「なぜ人々は互いに(im)polite と評価しあうのか」という問いにおき換えられるわけである（Ibid.）。

上述のような社会的モデルがもたらす視点は複雑なポライトネス現象へのアプローチとして「革新的」であるが，問題がないわけではない。たしかに，Eelen のように，相互作用に関わる人にとって有意味な概念や語句での行動の（個別文化的）イーミック的説明と外部の観察者による（中立・普遍的）エティック的説明とを分けることは理論的に可能である。しかし，

現実の相互作用における言語行動を互いに評価する判断の拠りどころとなる特定の社会や共同体の基準や規範は個人の habitus として内面化されているが，その判断や評価の根底にはあるはずの「共有された想定」，つまり一般の人々が意識せず一般化もしない（できない）そうした共有された「想定」や「原則」のようなものをあぶりだして概念化するのが研究者＝観察者である。つまり，家庭や教育や経験を通じて獲得され，共同体のメンバーの habitus として定着し慣習行動を暗黙裡に一定の範囲内に収めるよう律していると想定される社会慣習や規範のシステムはどのみち一般の人々でもある研究者が説明すべきものである。(Eelen も etic/emic の区別を維持するのが難しいと認めるように)，politeness1/politeness2 の区別も実質的には，一般レベルの politeness 現象を対象としながらも科学的説明理論（politeness2）のための普遍的概念化を心がける努力目標とみなすべきであろう。Eelen（Ibid.: 252）は，まずは（漠然として，矛盾もあり，捉えどころのないものだとしても）politeness1 をポライトネスの研究主題をすべきとするが，B&L にあっては，演繹法的に politeness1 に相当する一般の人々の慣習行動や評価の背後に想定される行動規範の基本要因を言語や文化を横断する抽象的な face という普遍的概念に還元したわけであり，しかもこの概念は一般の人々の使うもの（つまり politeness1 の用語･概念）でもある。もちろん face には文化差があるほか，複雑な現象を face/facework に還元することで取りこぼすものも少なくないはずではあるが，これは演繹的手法による一般化と普遍性の追求では避けがたいことである。Eelen（Ibid. 252）も「politeness2 に属する科学的説明は，（分析目的と動機だけのためとしても）ある程度 politeness1 を表す（represent）ため，politeness1 の考察が結果として politeness1 に直接由来しない概念や術語を使うことになってしまう可能性が大いにある」と認める。Eelen によれば，科学的説明はできるだけ一般の人々の使う politeness1 の概念をそっくり真似る（mimic する）ことを避けなくてはならないし，かりに普通の人々がポライトネスの説明に規範のようなものを持ち出したとしても，研究者は同じことをすべきではなく，むしろポライトネスに実際にはどうい

うものが関与しているかの洞察が得られるよう，規範に訴える人々の行動に狙いを定めてより綿密な考察を行うべきだとしている（Ibid. 252）。

もしポライトネス研究が心的実在性（psychological reality）を反映すべきならば，合理主義的アプローチのポライトネス論でも研究者は，etic/emic 的区別を意識したか否かにかかわらず，politeness1 と Eelen らが主張する概念を反映する一般化と説明をめざしてきたはずである。Eelen や Watts らのアプローチは，予測性の必要性を捨てることにより規範主義（prescriptivism）を避ける科学的方法をとり，安易な一般化を避ける手法として評価できるが，相互作用の当事者だけでなく観察者（専門家）の判断と評価もからむ politeness1/politeness2 の区別を維持することは，Mills（2003：8）の指摘通り，現実的でないばかりでなく，その峻別にこだわることがポライトネス現象の原理的説明に直結するかどうかは疑問である。

4.3. Watts（1992/2005, 2003, etc.）のアプローチ

Watts は B&L（1987）など従来の経験的研究の主たる問題点として，一般の人々の間でみられるポライトネスの評価や判断をめぐる言説的論争を無視し，ポライトネスという複雑な現象が単に facework に還元できるという想定や本来，個人が行う社会行為に対して主観的または間主観的に使われる〝polite〟などの語にもとづく〝politeness〟という抽象的な語を疑似客観的記述や説明として使うポライトネス理論の疑わしさをあげている（Watts 2003: 252）。Watts も Eelen とともに Bourdieu の慣習行動の理論に依拠した社会的モデルを志向し，やはり politeness1 と politeness2 を区別して前者を優先すべきとするが，Watts（2003: 9f）はさらに politeness1 を〝politic behavior〟と〝politeness/polite behaviour〟に分ける点や独自の「創発的社会ネットワーク理論（theory of emergent networks）」[3] を使う点で異なる。つまり，「社会集団の個人間の人間関係をある均衡状態で確立したり維持したりする目的に向けられる社会文化的に決定される行動（Watts 1992/2005: 50, 2003: 20）」あるいは「互いに共有される他人への配慮のかたち（Watts 2003: 30）」である〝politic behaviour〟のうち，「現

行の社会的相互作用にふさわしいと認められるものを超えた行動（Ibid.）」を politeness とみなすわけである[4)]。

無標の慣習行動として規定される politic　behaviour は，Fraser　& Nolen らの「会話契約説」における相互作用のとらえ方や井出（2006）らの「わきまえ」行動に類似した概念であり（Eelen 2001: 75, Locher & Watts 2007: 27），また Haugh（2003）の「推論されるポライトネス（inferred politeness）」と対比される「予期されるポライトネス（anticipated politeness）」にも近いが，B&L（1987）の対抗理論としての「言説的アプローチ」の意義は，一般通念としてのポライトネスを歴史的・社会史的に跡づけるとともに，politeness1 という（非専門家の言説での）内在的に不安定な概念を Bourdieu（1977，1991）の「ハビトゥス（habitus）」や「慣習行動（practice）」，あるいは「社会的ネットワーク（social network）」といった中核概念にもとづく「慣習行動の理論（theory of practice）」の一部として位置づけることにある。こうした politeness1 の概念を相互作用の起こる社会的状況や関与者（会話参加者）の評価によってゆれ動く動的なものとみる立場は，politeness 行動を「産物（product）」でなく「過程（process）」とみなすと観点にもつながる（Mills 2003: 1）。

Watts によれば，ポライトネス研究はなによりもまず言語・非言語行動に関する非専門家の評価を取り込む必要があり（Watts 2005: xli），一般の人々によって使われる肯定的評価を示す polite，polished，courteous，well-mannered などの語句や否定的評価の語彙である standoffish，snobbish，stuck-up，priggish などはすべて社会的行動に対する規範的で倫理的な姿勢を示すものとして参加者が社会的相互作用で使うものであり，そうした互いの行動が「言説による論議（discursive struggle）」[5)] の対象になるというわけである。この見方は前節での Eelen の emic 的概念・語彙を尊重すべきだとする見方と共通するが，Eelen 自身は，Watts（と Arndt　& Janney）が（B&L が理論的概念を現実世界の politeness1 に適用したような）politeness1/2 の混同を避けるために導入した politeness/politic behaviour の区別がどこまで「ポライトネス理論」たりうるのかと疑問を呈

している（Eelen 2001: 252）。

繰り返しになるが，politeness1/politeness2 を区別する理論的根拠として，Watts は，従来のポライトネス理論ではある社会行為の形式にたいしてトップダウン式に polite/politeness という用語を理論用語として適用するのに対して，上述の肯定的評価を表すはずの〝refined″，〝polished″，〝courteous″ といった語が一般の非専門家の人々によって使われる場合，ポライトネス理論研究での定義と対応することがまれであることをあげている（Locher & Watts 2007: 15）。こうした見方の背景にはとくに西欧ではポライトネス，とりわけエチケットの概念が社会の中流階級と労働階級とを分かち，その区別を固定化する役割を担っていた歴史的事情がある。Mills もポライトネス行動を中産階級の白人女性と連合するたぐいの固定観念ではポライトネスの多様性と複雑性を把握できないと見ている（Mills 2003: 151）。

Watts によると，非専門家によるこうした言論や相互作用を綿密に分析することで，ポライトネスに関わるさまざまな語句がいつ，どのように使われるか，また参加者が互いの言動を意識したことを示す言語的・非言語的反応をしているかどうか，などが研究対象となる（Watts 2005: xli）。しかし，この主張の妥当性は無標の politic behaviour と「追加の支払い（Ibid. 202）」である有標の polite behaviour を分ける基準が妥当かどうかにもかかっている。

Watts（2003：170）は，ある言語表現が〝polite″と解釈できるものと分類されうる方法が少なくともひとつはあるとする。研究者（会話の当事者）は，まずある相互作用で必要な politic behaviour を遂行するために求められる最小限のひと続きの言語構造がどういうものかを評価しなくてはならない。Bourdieu の表現にならえば，状況にたいする参加者の「実践感覚（practical sense）」やそういう場面で言語的ハビトゥスとして内面化したものが何であるかが問題となる。そうした感覚による politic behaviour を超えたものは際立つ（salient）ため，polite という評価を受ける可能性がある。しかし，その結論に達するには研究者は場面の諸特徴をしっかり見き

わめて，相互作用をきめ細かく，鋭敏な感覚で分析する必要があるという（Watts 2003: 170）。Watts の具体例をみてみよう。ある対談番組で司会者がゲストである医師に対して，

M: Dr. Weber briefly ╲ **can you explain** exactly what AIDS is ╲（強調は原著者。記号╲は発話の重複（overlap）箇所を示す）

と発言を促す場面がある。敬称（Dr.）は慣例的で politic な配慮とみられるが，briefly（手短に）という指示は（Dr. Weber はもちろん司会者自身にも）フェイス侵害行為（FTA）となりうるため（その証拠として），直後の発話では（番組の性格からは Explain to us exactly what AIDS is と言ってもかまわなかったのに），直前の FTA を補償するために，Can　you explain という準定型表現（politic behaviour を超過しており polite と評価されうる）を使っている。このため発話全体としては politic behaviour と判断される。つまり，一見，polite とみられる発話も修復的な facework であり，それゆえ politic behaviour の一部だというのである（Ibid. 171）。Watts によれば，politic behaviour の予測性は相互作用の当事者それぞれの habitus とその相互作用の目的に対してその社会集団から当人に与えられるフェイスの型から派生されるものとする（Watts 2003: 202）。このため，それ自体が本来的に polite というわけでない類の言語構造でも，もし発話の価値という点でそれが「余計な支払い」であることが分かれば，〝polite〞だと解釈されうるという。

また BBC の Panorama というテレビ番組での政治対談において司会者が対談相手の発言を遮って発した〝**sorry** if I interrupt you .. there〞という発話は，司会者が対談相手の気分を損ねる（つまり politic behaviour 違反）発言を修復して本来の politic behaviour に戻そうとしたものと解釈されるが，この発言は話の腰を折った直後にそれを正当化するために意図的に行った余計な発言であり，司会者が必要と考える以上の「余計な支払い」であるため不誠実な発言とみることができるとしている（Ibid. 強調筆者）。この場合，司会者と対談相手の間で力の行使をめぐる争いがおこっているとみるわけである。

Wattsの別の例では，観劇のための2枚の前売券をもった人が会場ですでに先客2人が座っているのに遭遇する状況が設定される。この場合，出方には選択肢がいくつかあるが，まずは自分たちがすでにその席を予約していたこと，なにかの行き違いがあったはずだということを確認することである。この状況では，次のようなpolitic behaviourの枠内での発話が期待される。

Excuse me.　I think you're sitting in our seats.

Excuse me but those are our seats.

I'm sorry.　I think there must be some mistake.

I'm sorry, but are you sure you've got the right seats?

こうした発話をpoliteだとみなす向きもあるだろうが，この場合，あまり他の選択肢がない，とみるものもいる。しかし，相手側はどうか。聞き手が自分たちの席だと確信していれば，遅れてきた人からHey!　Get out of our seats.と言われるようなことは予期しなかったはずだから，上の発話はどれもpolitic behaviourと判断するという。かりに，

I'm so sorry to bother you, but would you very much mind vacating our seats?

と言われたら，席が自分たちのものと確信している先客は自己防衛的に反応してもおかしくない。その番号の切符を手にしているものにとってはこの発話は正当なものだが，この状況で期待されるものよりも過剰なものであり，すでに座っている先客にはおそらく不必要に「攻撃的(aggressive)」―ただし同時に「丁寧な」―もの言いと認められるという。この状況ではこの他にもさまざまなやりとりが起こりうるが，いずれにせよこうした「交渉のやりとり」がpolitic behaviourをつくりあげることになり，それは当事者が互いにこの状況で予期することだから，politeではないことになる。このことから，politic behaviourとpolite behaviourとは等しくないこと，ただし，politic behaviourの範囲にある発話がときにはpoliteになりうると主張するわけである（Watts 2003: 257f)。Wattsによれば，「こうした社会的慣習行為のうちどういう行動がpolitic behaviourなのかを客観的

に予測する方法はなく(Ibid.: 258, 強調筆者)」,「適切な politic behaviour に気づくのは違反があったときだけである (Ibid.: 248, 強調筆者)」というわけである。こうした Watts のいわゆる relational work (関係作業)[6] の全体像は部外者には分かりにくいが, 念のため politic behaviour に関与する諸概念の関係を示す Watts の図を見てみよう (図1参照)。

図1で, 暗灰色の壁の左から4分の3を占めるのが, unmarked/politic behaviour に相当する〝non-polite〟の部分, また残り4分の1, つまり positively marked behaviour という表示のある三角地帯の斜め点線のつき当たりから縦に上ったところから右が〝polite〟とされる区域である。こうして,「ポライトネスは relational work の比較的わずかな部分を占めるにすぎず, 対人関係的意味 (interpersonal meaning) にかかわる他の型との関わりの中で理解しなくてはならない (Locher & Watts 2007: 10)」というわけである。さらに, polite behaviour とされるものが現実のやりとりでは肯定的にも否定的にも評価されることから, 言語構造そのものが polite あるいは impolite だと判定できるわけではなく, いずれの解釈にも

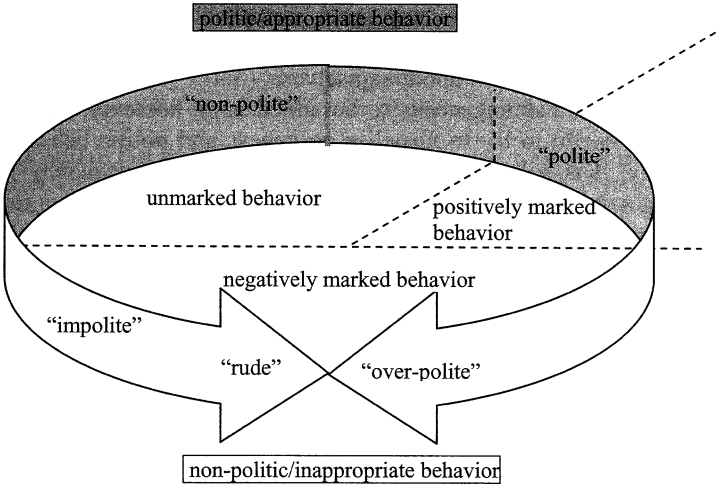

図1　Watts (2005: xliii) の (non-)politic/(im-)polite の範囲 (Watts 1992/2005: xliii)

開かれたものとみるのも言説的アプローチに共通する（Watts 2003: 157f）。つまり，politic behaviour のうちどれを〝polite〟とみなすのかは個人や社会（または社会集団）や状況などの変数により，さらには時代によっても変わる主観的かつ相対的なものである（Watts 2003: 31, 2005: xxiif）。

相互作用では先行する相互作用で確認された規範に合致しているかどうかは当然感知できるが，相互作用は多くの場合「無標」のもので，〝polite〟と評価されることはむしろまれであるとみるわけである。Polite behaviour（つまり，politeness1）は politic behaviour を超えたものである，とみなすことによって〝(im)polite〟という用語にはかなりの（許容値の）幅があることになるが，Watts（2003：258）によれば，これこそがまさに慣習行動の理論において一般の人々に言説上の不一致の余地があるものとして，politeness1 の理論で目指すべきものなのだという。

こうした politic/polite behaviour の区別については，すでに指摘したように，Eelen が問題視しているほか，この区別を維持するのが困難とみる向きや（Haugh 2006, Vilkki 2006: 329），この区別は「独創的（ingenious）」だが，とくに〝polite behaviour〟はもっと精査する（scrutinize）必要があるとする注文もある（Sifianou 2006: 668）。上の例からもうかがえるが，〝politic behavior〟は，Leech（1983）が politeness の中核概念とみなし，Goffman（1967）が〝face-work〟と「ほぼ同義」とした〝tact〟（気配り）という概念に類似している。おそらくこのため，従来ポライトネス現象とされているものの多くが〝politic behaviour〟に含まれるとみなされるのであろう。意識されない無標の慣習行動を politic と呼ぶか polite と呼ぶかの境目はまさに状況しだいであり，判断には多分に「主観」が入る余地がある。伝統的なポライトネス議論では politic behaviour を〝polite behaviour〟とみなす大方の「暗黙の合意」があったからこそモデルの構築が可能だったが，この前提がくずれると，その理論的帰結はどういうものであろうか。無標か否かの判断に際して相互作用でのやりとりや刻々と変転していく発話に関する受けとめ方を一つ一つ問題にしだすと，場面と参加者の habitus や個人個人の瞬間的な心の動きなど多様な（規定困難な）パ

ラメータであれこれ「算定」するまで〝polite″かどうかの判定はできないことになると考えられ，客観的な一般化は望むべくもなくなる。「もしこの考え方に従えば，ポライトネス研究者の出る幕がなくなるのではないか(if one follows this train of thought what is left for politeness researchers to do?)」という Haugh (2006) の論評は誇張だとしても，ボトムアップ的な「言説的」考察は，結局，基礎的フィールドワークという位置づけになるのであろう。似たようなことは，Arndt & Janney の「対人関係的ポライトネス理論」にも当てはまるかもしれない。

この politic/polite の区別については，Mills (2003：68) は「直観には反するが，有用な (useful)」ものとみている。「直観に反する」とみる理由は説明していないが，「有用」とみなすのは，ポライトネス研究によっては一般に politeness を表すものが社会的ポライトネス，あるいは politic behaviour であり，実際，Mills が面談した子供にとってポライトネスとは学校や親から繰り返し躾けられる（Watts が社会･文化的に決まっているとする）もの，そうした社会的慣習で強制される politic behaviour であるが，実は，そうした行動や規範をどうみるかには子供の間で個人差（や反発）があるからだという（Mills 2003: 69)。Watts (1992/2005：51) では，politic behaviour から外れた有標の行動を，(1)コミュニケーションの挫折（communication breakdown) をもたらすもの，と(2)他者に関して自己の立場を高めること，つまり，他の人たちに自己のことをより良く評価してもらうよう仕向けることの 2 種類に分け，前者を〝non-politic″ behaviour，後者を〝polite”behaviour とするが，politic behavior を Bourdieu の〝habitus″と調和するものという前提で，(non-)polite behaviour を通常予期される行動を超えるという根拠によって politic behaviour から切り離す議論には理論的な問題がある。社会学者の White は，Bourdieu の habitus の性向 (dispositions) とは本来期待される行動形式だけでなく期待 (予期) せざる行動形式をも位置づけ，評価する分類的スキーマを内蔵しているものであり，このような habitus は，(im)polite behaviour の形式を同定できるだけでなく，politic な行動様式と (im)polite な行動形式の両方を表現できる

ものであると指摘する（White 2005: 2）。個人が内面化した habitus という概念は「構造化された構造（structured structures）」と同時に「構造化する構造（structuring structures）」から構成されるものであり（Bourdieu 1977: 72），客観性と主観性を仲介し，調和する柔軟性をもつものである。それは日常生活においてどう行動し，反応するかの感覚をも与えるものである（Thompson 1991: 13）。Bourdieu の意図は，個人に「ゲーム感覚（feel for the game）」，つまりその状況で何が適切で，何が適切でないかの「実践感覚（le sens pratique）」を与えるものであることからすれば，主観性を前面にだす Watts の habitus の解釈を politic/polite の区別に適用する議論には問題がないわけではない（Thompson 1991: 12f, White 2005: 2 参照）。

Watts らは，理論用語としての politenes2 を対象とするポライトネス理論のモデルを構築して〝polite linguistic behavior〟の普遍的性質を考察することは可能だとするが，このようなモデルは B&L に代表される従来のモデルとは根本的に異なり，モデルの構築も人々が実際に自分たちのことば使いの（politeness1 での）用法を綿密かつ集中的に観察してはじめて可能になるものだと主張する（Watts 2005: xxii）。

このアプローチは〝(im)polite(ness)〟という用語の科学的厳密さの欠如を問い直すことから出発したはずであるが，Eelen の emic/etic の議論でも触れたように，その議論の帰結として一種の循環論的規定になりかねないようにみえる。実際，Watts 自身も最終的には politeness 以外の〝face〟，〝politic behaviour〟，〝habitus〟，〝social field〟，〝symbolic capital〟といった鍵概念もより適切な理論的記述が必要であることは認めている（Watts 3003: 262-3）。上の具体例も示すように，やりとりの状況あるいは社会・文化的慣習や意識あるいは意図の差（これも観察者による判断のゆれを伴う）に還元され，刻々と判断が変わるような politic/polite の区別を議論の基盤とする理論の妥当性には疑問の余地がある。

すでに触れたように，Watts は，「フェイス（面目）」の概念そのものの有用性や普遍性は認めるが（Watts 2005: xviii），ポライトネスの定義に合

意がないことや（B&L の）フェイスの概念そのものに少なからぬ言語文化差があることから，フェイス侵害行為を補償する方略としてのポライトネス観は普遍性と妥当性に欠けるとする（Watts 2005: xix)。ただし，最近の論文では，B&L の提案する方略を「関係作業（relational work)」の現れとみるなら，その枠組みは使えると述べている（Locher & Watts 2007: 10)。しかし，そうした方略は relational work の一部にすぎないとみなすわけである。

この立場では理論の「politeness2」の構築はどうなるのか。Watts によると，「ポライトネス 2 の理論は言説による論議（discursive dispute)，すなわち（im)polite behaviour が一般の人々によってどう評価・論評されるかを扱う必要がある（Watts 2003: 9)」として，慣習行動（practice）としての相互作用の様相をありのままに観察・記述する方法をとる（Watts 2003: 118）が，Watts の手法は〝post factum″（相互行為が行われた後の）評価でなく，相互行為の中での real time での評価を優先する（Watts 2005: xx）点で，批判的言語分析（CLS）や会話分析よりも徹底しているように見える。言語共同体の非専門家である成員（相互作用の当事者たち）が相互作用での（im)polite な振る舞いを互いに評価し論評しあう日常概念のポライトネスを綿密に観察することにより他者への配慮を共有する社会行動の型を指示する普遍的なポライトネスの理論を構築できると主張するわけである。一般の人々の社会的行為を polite とか impolite とか規定することはきわめて主観的で，談話一般にかかわる議論の問題であるばかりでなく，そういう行為自体が否定的，肯定的，中立的などとして評価される可能性があるというのが Watts らが従来の「合理主義的」モデルを否定する根拠だったが，そうした評価のゆれや主観性はまさに個人性の現れに他ならず，そうした「個人性」は B&L のフェイスを批判する根拠だったはずである。この手順はある未知の言語のフィールドワークで普通の人々をインフォーマントとして目標言語の言語単位を同定するかのような作業であるが，ポライトネス行動の個人性やゆれの細部を追求すると個人や特定の集団の性向の研究になりかねないと思われる。

普遍性の議論に関しては，Watts（2003：261）は，（im）politeness1 の理論は，（Bourdieu の）社会慣習行動の理論の一部として概念化できるとし，社会的慣習行動があらゆる社会的，人間的存在の形式において普遍的であることから，（im）politeness1 の理論も当然，普遍的でなくてはならないとみる。しかし，すでに触れたように，politeness2 の基礎であるべき politeness1 の普遍性がどのようなものかはなはだ分かりにくい[7]。Watts は，どんな文化集団や社会集団にも相互作用における politeness1 の分野での社会行動を評価する〝polite″，〝impolite″，〝well-mannered″，〝rude″，〝standoffish″といった用語に相当する語彙があるはずであり，politeness1 は普遍的にちがいないという。しかし，この politeness1 のモデルは politeness2 の普遍的モデルとは異なるはずだとする。つまり，後者のような politeness の概念に客観性をもたせたものは，言語や文化を横断してその概念の例となる発話を探す必要が生じ，そのため発話の諸々の構造的分類（taxonomy of linguistic structures）が行われることになる。しかし，この作業は同一の発話の評価をめぐる一般の人びとの判断の差を観察する妨げになるとして，Watts が一般の人々の直感を反映しないとして終始異を唱えてきたものである（Ibid.）。そのモデルにある politeness2 の概念を指すとみられる言語構造と合致するような言語行動の異文化的相違はつきとめられるかもしれないが，肝心の同一の社会文化集団内の人々による言説的論議―ある言語表現が〝polite″か〝impolite″かをめぐるもの―やその帰因の示差的価値（the differential value of that attribution）についてはまだなにも解明されていない。しかし，politeness2 の論議の基礎となるべき politeness1 を相互作用の参加者に慣例的に求められる politic behaviour を超える（またはそれに意図的に背く）行動として概念化することによって，politeness という用語の解釈の差や社会的慣習行動の理論に不可欠な言説的論議を考慮できるようになる，というのが Watts の論理なのである（Ibid. 262）。こうして，politeness1 の概念化を経験的研究に生かす方法をテレビやラジオ番組における自然談話など（politeness1）の分析に適用してみせているわけであるが（Chapter 9），その論議では分析者（Watts）

はなかば必然的に「修復的な facework」のような，一般の人と無縁の（つまり politeness2 に属する）用語や概念を使用せざるをえないのである（上述の Vilkki（2006：328 f）や Eelen（2001：252）の emic/etic の横断に関する議論も参照)。

このモデルは Watts が自任するように，「社会的相互作用とそこでの言語の重要性の総合研究に対する貢献（Ibid.)」には違いないが，Eelen の emic/etic の議論と同様，politeness1/politeness2 の区別や politic/polite behaviour の領域規定や方法論にはまだ未解決の問題が残っている。

4.4. Mills（2003）の「慣習行動の共同体」モデル

以上やや詳しくみてきた Eelen と Watts の社会的モデルとの関連で，やはり Bourdieu の慣習行動の理論などを援用する Mills（2003）の「慣習行動の共同体モデル（community of practice model)」をすこし検討してみよう。

Mills のモデルは，相互作用の複雑な語用論的モデルを開発するためにはどうすべきかという問題意識から「ジェンダーと言語的ポライトネス及び両者の関係に関する従来より共同体を基盤とする（発話レベルでなく）談話レベルのモデル」を志向する[8)]。Mills も B&L らのポライトネスのモデルやそのモデルの実質をなんら基本的に変えることなくモデルの諸相を修正することに終始している他のモデルを批判する。B&L のモデルが話者の想定する意図を分析するにとどまり，話者と聞き手の評価や判断の役割を分析せず，言語の産出と解釈に影響する社会的要因(人種，階層，ジェンダーなど）のかかわりをとりこむ複雑なモデルを採用しないという欠陥をもつとし，これに代わり，コンテクストや社会の圧力など話者や聞き手に特定の場面でのポライトネスやインポライトネスの必要性や適切性を判断させる要因を考慮する方向をめざすべきとする（Mills 2003: 244-5)[9)]。その基本的主張は,「ポライトネスは単に発話がもつ特性やもっぱら個人による一連の選択の問題とはみなせず，それはむしろ慣習行動の共同体が開発し，肯定し，論議する一連の慣習行動や方略であり，またこうした共同

体における個人がその集団内で自己や他人の行動や地位について評価するために従事する一連の慣習行動や方略（Mills 2003: 9）」というものである。

こうした Mills（2003：4）の「過程モデル（process model）」は Eelen や Watts らの基本的主張に近いとみられるが，Eelen が言語行為にからむ適切さ（appropriacy）の判断が動的だとみる点は評価するものの，固定観念（stereotype）の役割感覚と適切さの概念に関する人々の処理のしかたに対する固定観念の影響力を加味すべきだとする点やより広い社会と制度による個人への圧力や個人の慣習行動の共同体レベルを超えた力（forces）との折衝といった側面も考慮する点で異なる（Mills 2003: 4）。個人への既成観念や固定観念，あるいは社会制度の圧力を考慮するのは Mills だけではないが，彼女の立場はジェンダーやポライトネスという概念の安定性を問題視し，これらを「過程（process）あるいは会話において人々が行う評価（evaluation）の行為である（Mills 2003: 1）」とみる「過程モデル」を提案する点が特色である。既述の通り，politeness1/politeness2 の区別については，ポライトネスが性質上，判断と評価の問題であることから，この区別を維持するのは，Eelen や Watts が考えるほど容易ではないとみる（Mills 2003: 8）。さらに，Mills にとってポライトネスとは単に個人が他人への配慮や自己利益や社会的制約のために選択する行動ではなく，多様な動機によって選択する行動，あるいは押しつけられると感じるような行動とみられ，この多機能性こそが，他人が〝polite〟だと意図する発話が多様な解釈を許容する理由を説明するという。社会的なポライトネスにおいては，社会制度と同様，社会的なコンセンサスとしての「適切さ」（appropriateness）という議論の余地ある概念の役割も Mills はみとめる。言説的アプローチに属する Janney & Arndt（1992：22）が「適切さ」のような抽象的な概念を排除して，抽象度を下げ，人々が日常会話でお互いの感情をどう表明しているかに系統だった注意を払うべきだとするのに対して，Mills は集団にみとめられる一連の規範とのからみで個人が自己や他人の発話を評価する方法を論ずる際に「適切さ」という概念が有用であることを認めるわけである。

こうした Mills の「慣習行動の共同体アプローチ」では，ある共同体の規範や社会的制約が個人にある行動の選択を促す力になることを認める点で，Parsonian 的立場に近い印象も与えるが，規範や社会的制約の規制力を過大には評価しない。むしろ，人種や階級あるいはジェンダーなどの要因が言語の産出と解釈にどう影響するかをみる複合的モデルを志向し，ポライトネスをコンテクストや相互作用の関与者だいで個人が見方を変える広範囲の行動であるとみるわけである（Ibid. 245）。Politeness1/politeness2 を峻別しない点でも Mills のスタンスは Watts や Eelen よりも現実的と言えよう。なお，Mills も B&L のモデルを全面的に否定しているわけではない。B&L の研究にはきわめて洞察力のある要素が含まれていると評価はするが，そのモデルは，ポライトネスの規範が慣習行動の共同体において個々人によりどう交渉されるのか，またある人が polite だったか impolite だったかをめぐっての誤解や意思疎通の阻害のようなものを扱えるほど複雑なものではないとみる（Ibid.: 245）。ポライトネスは複雑であり，polite かどうかは相互作用の参加者にしか分からないというわけである。Watts のアプローチでも触れたように，こうした見方では「ポライトネス研究者に残された仕事はなにか（Haugh 2006）」という疑問が生じかねないが，ポライトネスは分析不可能という悲観的見方は否定する。ポライトネスは相互作用の当事者が他者との関係を構築するのに使う資源（resource）であることに違いはなく，自他のポライトネス及びインポライトネスの用法はいずれも内省可能だとする。Mills はポライトネスを貨幣（money）に似た一連の資源とみなせるともいうが，その理由は，貨幣も他人との関係構築の方法であるが，相互作用の当事者が互いに異なる通貨と異なる交換基準を扱っていることが往々にしてあるからだという（Ibid.）。なお，個人と社会を仲介する象徴的資源（価値）としてのポライトネスと貨幣との類推については，すでに Werkhofer（1992/2005）に詳しい考察があり，Watts（2003: 143f）もこの類比をとり込んでいる。

Politeness に 2 つのレベルを認めず，共同体の役割を重視するものの，還元主義を排し，談話を分析対象とすべきとみる Mills の基本的主張は社会

的モデルと同列とみられるが，同時に Eelen や Watts らと同様の研究方法上の問題点もかかえていると言えよう。

4.5.「言説的モデル」の関連理論―Bourdieu の社会理論と関連性理論など

以上，言説的アプローチに属するとみられる Eelen，Watts 及び Mills の主要な論点をみてきたが，Watts と Eelen の言説的アプローチと Mills の「慣習行動の共同体」モデルが援用する Bourdieu（1977，1991）の「慣習行動の理論（a theory of practice）」や「関連性理論（Relevance Theory）」などが「言説的アプローチ」のポライトネス研究にどうかかわるのかをすこしみておきたい。

4.5.1　Bourdieu の社会理論

Bourdieu（1930-2002）は理論的思想を日常生活にもとづく経験的研究と結びつけようとする（文化社会学とも呼ばれる）「慣習行動の理論」で知られる（独立）左翼系の社会科学者である。社会学は Saussure にはじまる言語学とその概念が社会理論に対して行使している支配の形式の桎梏から解放されうるとし（Bourdieu 1991: 37），1970 年代後半から 1980 年前半にかけて，社会理論に大きな影響を与えた Saussure，Lévi-Strauss，Chomsky といった言語学者や文化人類学者，とくに Saussure の langue/parole と Chomsky の competence/performance（当時，現在は I-language/E-language）の区別，とくに自律的，同質的なものとしての langue や competence を重視する方法論を痛烈に批判している（Bourdieu 1991: 37）。いかに個人的で取るに足らぬ言語的相互作用でも社会構造の痕跡をもっているのであり，こうした言語学の学問的枠組みでは言語の形成や使用にみられる特定の社会的政治的条件を把握できないというわけである（Bourdieu 1991: 2, Thompson 1991: 2）。Bourdieu は言語自体は社会的，歴史的現象であること，言語的交換（linguistic exchanges）は他の諸々のもの同様に，日常的（世俗的）な慣習行動であり，また言語がもつこうした社会的，歴史的ならびに実践的性質を無視する言語理論は失うものが多いとする。

Bourdieu の慣習行動の理論は，客観主義にも現象学的主観主義にも与せず，その二律背反を解決するために habitus と field を使うわけである。人々が相互作用を構成する社会行為を遂行するやりかたは，相互作用にかかわる人々のそれ以前の歴史に依存する，という想定にもとづき，直接体験とは切り離す必要を考慮しながら，同時に社会生活の実際的性質をも正当に扱う，という行き方をとる（Thompson 1991: 12)。Bourdieu は難解をもって知られ，そのスタイルはときに「過度に不透明」とも評される。「ブルデューの概念は，新しい用語であるにもかかわらず，明確な定義をもって使用されてはいない (山本 2007：23)」ともいわれるが，ここではポライトネスの議論で「言説的アプローチ」が援用する habitus，disposition[10]，practice[11] などの鍵概念に限ってみていく。

社会的相互作用における言語行為を含む「慣習行動」（practice）とは，

［(habitus)（capital)］＋field＝practice

という Bourdieu の公式にもとづく。そこでは「ハビトゥス」は先述のように，「持続可能で，置き換え可能な性向（dispositions）の体系（Bourdieu 1977: 72)」であり，また「慣習行動」とは「(社会の）場（field)」の客観化された社会構造と参加者のハビトゥスと資本の形態の産物である」とされる（Watts 2003: 256)。ここで「資本（capital)」[12] とはさまざまな物質的，文化的，社会的資源 (resources) が結びついたもので，身につけたり，社会から付与されているような出身階層，身分や学歴など個人がもつ資源であり，それが個人の habitus の一部となるとみる（Watts, 2003: 148f)。Bourdieu の「資本」には不平等を生産•再生産するために使われることもある社会的ネットワークの価値も含まれる。また，「場（F. “champ”)」とは人々が望ましい資源を求めてうまく立ち回るべく努力する社会活動の領域にあたる。Watts（2003：150）は，すべての人の社会的慣習行動にとって基本的なものは言語であるとして，Bourdieu の公式を再解釈し，場面に応じた言語的発話を言語的慣習行動として概念化し，慣習的言語行動を次のような公式に改訂してみせる。

［(linguistic habitus)（linguistic capital)］＋linguistic marketplace＝

linguistic practice

すなわち，言語的慣習行動は，個人によって言語的 habitus として内面化された言語的性向（linguistic dispositions）と個人が市場で獲得した言語的資本がかけ合わされたものが場の客観化された言語構造と結合する際の結びつき方に等しい，とみなすわけである（Watts 2003: 150）。Watts のこうした解釈については，habitus を単に「主観的構造」を表すものとみて，Bourdieu の意図する客観性と主観性を媒介する概念の広がりを無視しているとの批判があることはすでに指摘した（White 2003: 2）。

すでに述べたように，「社会的相互作用の経験を通じて個々人により客観化された社会構造に適切なやりかたで振舞う一連の性向（Watts 2003: 274）」という Bourdieu の habitus は Watts の politic behavior に通じるが，Watts によれば，慣習行動の理論に 2 つの側面があるのと同様に，habitus にも 2 つの側面がある。すなわち，一つは，個人が目下の相互作用を処理するのに使うために客観（対象）化した社会構造を内面化（自己のものと）する仕方を形成する。つまり，habitus は実際にそうした客観化された構造から politic behavior の形式を構成するという。したがって，集団と個別の歴史が目下の社会的相互作用において個人に「ゲーム感覚（feel for the game）（Watts 2003: 75, 148, etc.）」を与えるのだという。つまり，サッカーなどで選手が他の選手の次の動きを予期しながら動くように，慣習行動は単なる決まりきった行動ではなく，たえず即興的なふるまいに対応できるものでもある。ポライトネスも同様であり，「文化によって決定されている（それゆえ教えられない）（Ibid. 75）」とみるわけである。

Bourdieu では日常生活における個人の主観的活動とそれを規定している客観的諸構造を habitus が規定・媒介しているとみる。上の Watts の公式で見たように，Bourdieu の言語交換の理論では，言語がかかわる慣習行動は「言語的 habitus」という表現で表わされる。たとえば，Bourdieu（1991: 37f）によると，「あらゆる発話行為，より一般的にはあらゆる行動は，独立した一連の因果関係間の出会いである情況の結合（conjuncture）であり，一方には社会的に形成された言語的 habitus の性向があるが，こうした性

向は，特定の事柄を言ったり語ったりするなんらかの傾向（表現的利害）や文法的に正しい談話を無限に生成するある種の言語能力とこの能力をある特定の状況で適切に使う社会的能力を含意する。他方には，言語的市場の諸構造があり，これが特有の認可と検閲の体系として，人々に押しつけられる」。さらに，Bourdieu によれば，「言語の生産および流通を言語的 habitus とそれらの habitus 自身の生産物の供給先である市場との関係とみる単純なモデルは，コード（記号）の厳密な言語的分析に異議を唱えるものでも，それに取って代わろうとするものでもなく，言語学が蒙った誤りと挫折を理解させてくれるものであるが，この誤謬は言語学がその多様な関与要因の唯一つだけに依存して，抽象的に規定された厳密な意味での言語能力がそれが生産される社会的条件に負うているすべてを無視し，談話をその結合の局面の特異性において適切に説明しようとした際に陥ったものである（Bourdieu 1991: 37-8）」。つまり，言語が使用される社会的な領域と habitus の相互作用を強調するとともに，「文法は意味をごく部分的にしか決定しない。談話（言説）の意味作用が完全に決定されるのは，それが有する市場との関係においてである（Ibid.）」とする。

Bourdieu（1991：80）自身はポライトネスの問題を正面から論じてはいないが，関連する言及はある。たとえば，言語のスタイルの違い（stylistic variation）を市場の緊張関係（つまり条件）とからめて論じているが，ポライトネスも当事者間の資本と慣習行動が行われる市場にあわせてとられる言語形式の選択の問題ととらえ，〝tact〟や〝adroitness〟と呼ばれるものは多種の資本あるいは性や年齢の階層，およびその階層にきざまれた境界内の送り手と受け手の相対的位置を考慮する術（art）とみなし，その境界を儀礼的に越境するにあたっては多様な言い回し―「婉曲語法（euphemization）」を使うという。Thompson（1991：19-20）の解説に従えば，「（Bourdieu の見方では）あらゆる言語表現は市場の構造に由来するある種の検閲によって修正された「婉曲表現」であり，（中略）この観点からみると，しかるべき場でしかるべき語を選択するポライトネスと気配り（tactfulness）の現象は，例外的現象ではなく，すべての言語産出に共通のある

状況のもっとも明白な表明にすぎない。「気配り」とは市場の条件を正確に査定し，それにふさわしい言語表現，つまり適切に婉曲化した表現を産出する能力に他ならない」というわけである（なお，Bourdieu 1977: 94–5 も参照）。

以上，Bourdieu のポライトネスにかかわる用語と概念を原典に即してみたのは，Eelen (2002)，Watts (2003)，Mills (2003) らの社会的モデルの理解と評価に不可欠と思われるからである。既述のように，Watts が politic behaviour と polite behaviour を分けるに際して援用した Bourdieu の habitus の概念が Watts では（polite behaviour を除く）politic behaviour に相当するものと「不注意に」狭く解釈されていると批判する White は，Watts が habitus を単に「場」の「客観的構造」と結びつく「主観的構造」を表すかのように含意しているのは，habitus が「構造化された諸構造」と「構造化する諸構造」から同時に成るものであり，客観性と主観性を媒介する広がりを無視している」からだとする（White 2005: 2）。White によれば，Watts による図式の因果関係の解釈は，habitus を個人と社会的慣習行動が相互に構成しあう関係，ととらえるものとは異なる意味になるという（Ibid.）。ポライトネスとのからみでは，habitus の性向それ自体には期待される行動形式も予期せぬ行動形式もともに位置づけ評価する分類の図式（classificatory schemas）が必ず含まれているから，Watts が（im）polite behaviour を通常期待される行動を超えたものとみて politic behaviour を切り離し，後者を habitus と調和するものとみるのは問題だとする。すなわち，Bourdieu の habitus の概念は（im）polite behaviour がなにかを明らかにできるだけでなく，politic な行動形式も（im）polite な行動形式も容易に表現できるものだという（Ibid. 2）。このような White の解釈が正しければ，habitus を politic/polite の区別に使う理論的根拠はあやしくなる。

4.5.2 関連性理論（Relevance Theory）とポライトネス

Watts（2003: 153, etc.）はコミュニケーションに関する関連性理論（以下 RT）の知見を取り入れた議論を展開しているが，その理由は，一般に認

知とコミュニケーションを聞き手の推論過程の視点で扱う RT の理論が politic　behavior と（im)politeness の説明に応用可能だからであるが（Watts 2003: 217），さらに，CP の補完原則としてポライトネスをみる「合理主義的アプローチ」を批判するのに Grice に批判的な RT が好都合だからと考えられる。ここでは，「言説的アプローチ」や「慣例行動の共同体モデル」がとりあげている Jary (1998) を通じて，ポライトネスに関わる RT の主張，つまり RT のコミュニケーションモデルが話者の選択する言語形式（や発話行為）自体がポライトネス（の意図）を表す（伝える）わけではないこと，（言語）行動に対する社会文化的制約に無意識に従うこと（politic　behavior）と自己中心的な目的に向けて方略を使う行動（polite behavior）とを区別する Watts の主張，あるいはポライトネスが推意により伝わるというよりも予期（anticipate）されるものとする見方（Fraser 1990, Watts 2003, Haugh 2003, etc.）などに RT の推論モデルが適合するという主張，さらに規範にもとづく説明理論の代案たりうるとする見方を検討してみよう。

関連性理論（Sperber & Wilson 1986, 1995[2]，以下 S&W）は，周知の通り，心的実在を反映する聴き手の推論の機序の解明をめざす理論である。発話の解釈に際して聞き手が採用する評価基準は，人間の認知が一般に関連性志向であること[13]，すなわち，相手の発話やしぐさには，その状況でほとんど必ず関連性がある（つまり認知環境を変更し，拡大する情報価値がある）ものに自動的に注意が向けられると想定する[14]。この原則は，「関連性原理 I（人の認知は関連性を最大化するように適応される）」という人の生物的機能と適応としての認知と認知機構（S&W 1995: 261）を説明するものと「関連性原理 II（伝達的関連性の原理＝すべての顕示的（意図明示的）伝達行為は，それ自体が最適の関連性をもつことを想定していることを伝える）」の 2 つからなる（S&W 1995: 260）。つまり，「人の認知は関連性を最大化するように適応される傾向をもつ（S&W: 262，強調は原著者）」ということである。

さて，この理論ではポライトネスはどのように扱われるのか。B&L

（1987）は，再版の序論でRTに触れて，Griceの4つ公理（公準）を「関連性」という単一の公理（というよりも既述のとおり，人の環境の刺激の情報価値を最大化する人に生得的な（認知の）傾向）に還元するRTの見解では，ポライトネスの推意も他のすべての推意と同じように生じる，すなわち話し手が言ったことは関連性（コンテクストに直接関係する最大化された情報）をもつという想定にもとづいて，ある（ポライトな）推定（certain polite presumptions）がなされなくてはならないだろうと言う（B&L: 4）。

これに対して，RTによるポライトネス研究を代表するとみられるJaryは，B&Lのテーゼ，つまりポライトネスの意図はポライトネスを伝達することであり，しかるべき言語形式や方略を使うことでポライトネスが（必ず）伝わるとするコミュニケーション観と対照的な見方を示す。関連性理論では，そうした言語形式や方略を使用しても必ずしもポライトネスが伝わるわけでなく，また基底のメッセージを超えたなにかが伝わるとは限らないと予測する（Jary 1998: 6）。RTの想定によれば，（im）politenessが注目される，つまり関連性をもつのは，話者の行動がなんらかの点で聞き手の想定するレベルよりも高いか低いか，聞き手を顧慮していることを示す証拠を与えるときだけである。話者はふつう最適の関連性をもつ刺激，つまり聞き手が話者の意図を余計な処理努力をすることなく解釈できるような（言語的または非言語的）刺激を使わなくてはならない，という制約を受けるが，同時に話者には，短期的および長期的目標を達成するという制約もある。すなわち，短期的には聞き手に何かをさせたり，信じさせること，長期的にはある集団の中で好かれ敬われる成員でありつづけること，という2つの目標を満たす欲求による制約を受けるというわけである。従って，話者はそうした短期および長期の目標を達成するのに不利にならない想定だけを顕在化（manifest）する刺激を選ぶのだとする（Ibid. 12）。話者の刺激の選択は，したがって，一方では聞き手に不利益な想定を顕在化させまいとする欲求の制約を受け，他方では自分の行動がもたらすなんらかの有益な含意（beneficial implications）に関して誠実にふるまってい

ると見なされる必要性の制約を受ける。この見方は，ポライトネスが「無礼にみえる」ことと「丁寧すぎる（too polite)」ように見えることとのバランスの問題とみる直観に対応するともいう（Ibid.: 12)。

要するに，話者は言語形式と語用論的方略を選択するにあたって，聞き手に配慮しているというなんらかの証拠を示す可能性が強い。話者は，自分が聞き手をどうみているかという聞き手の推定が正しいことを示す証拠になると思う言語形式や方略を選択するとみるが，この見方はポライトネスを無標の社会的指標とみる観点に等しいと Jary は言う (Ibid. 13)。こうしたポライトネスの見方が Watts の〝politic behaviour〞や〝anticipated politeness (Haugh 2003)〞の概念と相通じるわけである。

こうした見方や Grice の CP の（より包括的な）代案を提供するという点で，Watts（1992/2005，2003）は RT が「言説的アプローチ」の妥当性を裏づけるとするが，RT は社会的モデルとは異なり，あくまで抽象的で心的実在性のある個人の認知レベルのしくみを扱っていることに留意すべきであろう。一方，Mills（2003：62）も Jary による RT のポライトネスの説明法をとりあげているが，RT がコンテクストを捨象して純粋に認知的処理の様相に特化しているのに対して，Mills の「慣例行動の共同体」モデルはコンテクストや話者が共同体又は社会の規範と想定する制約との関連で処理すること，さらにより広い集団などが個人に課す制約を認める点で RT のアプローチとは異なることを明確にしている。

Jary（1998：18）は，B&L の理論には批判的であるが，「ポライトネス」という語と概念がエチケット教則本の規範を超えて，フェイス侵害（可能性）の緩和を目的とする語用論的方略全般を包含するという B&L の重要な知見を保持できること，しかもそのためにこの緩和がポライトネスの伝達を通じて行われるとする問題の多い漠然とした主張をせずに済むのが RT の強みだと主張する（Jary 1998: 19)。Haugh（2003：406）は，ポライトネスを「予期されるポライトネス」と「推論されるポライトネス」に分ける独自の理論を展開しているが，RT によるポライトネスの説明で（も）使われる鍵概念である「認知効果」や「処理努力」の性格が十分に明

らかにされていないこと，とくに，「肯定的情動」（是認や温情など）と「否定的情動」（敵愾心や疎外感など）をもつ認知効果を区別しないことを問題視する。

RT はそもそもポライトネスを説明するための理論ではなく，またときに批判されるように，自然談話を対象としないなど，還元主義的方法論をとる点では「合理主義的アプローチ」にむしろ近いものである。また「社会的慣習行動」の（im）politeness 理論の理論的基盤になっているわけでもない（Watts 2003: 203, 212）。発話解釈に関する推論過程に関する独特の認知語用論的アプローチが結果として，ポライトネスを無標のものとみて，聞き手の発話解釈や評価を重視する Fraser（1990）の会話契約説や Eelen（2001）及び Watts（2003, etc.）らのモデルに好都合な側面をもっているものの，RT が多様なポライトネスの諸相の包括的な説明理論としてどれほど有効かはまだ明らかでない。

以上，言説アプローチが援用する理論のうち 2 つを取り上げて，援用や依拠の根拠らしきものをみたが，Eelen，Watts および Mills の言語観，とくに社会的歴史的に言語使用をとらえる基本姿勢は，ある意味では批判的談話分析（critical discourse analysis, CDA）（van Dijk 2001）や批判的言語分析（CLS）（Fairclough 2001: 23, 86, etc.）の基本的立場にも似ているし，（Watts には言及はないが，B&L が親近性をもつ）Gumperz（1982）などの相互作業の社会言語学（interactional sociolinguistics）とも共通点がある。たとえば，CLS の分析も Bourdieu の社会理論を援用し，伝統的な語用論の個人性や抽象性を批判し，発話の産出と解釈を（社会の成員が長期記憶に内在化した）「成員の資源（members' resources）」と解釈する発話との相互作用の結果とみる（Fairclough 2001: 10）。談話（社会的慣習行動に相当する）と社会構造の関係を弁証法的にとらえて，社会的慣習行動が現実を反映するだけでなく，現実に対して能動的関係にあって現実を変えるものとみなし，さらに相互作用における「力（power）」の（不平等な）役割を重視するなど Bourdieu 的社会観をかなりとりこんでいる。ただし，ポライトネスの問題は談話と力の関係に関する議論で「フェイス」と

からめて間接的にしか扱われていない。Fairclough は，言語形式に固有の影響力を及ぼす社会状況の特性のひとつである形式性（formality）は，力の行使と関連する慣習行動への 3 つの型の制約，つまり内容，主題及び関係（性）への制約を強めた形で明示するとし，関係（性）の観点からは，形式的な状況の特徴は（主体の）位置や地位及び〝face″に対する位置づけと区分であるとする（Ibid. 54f）。つまり，力と社会的距離が明白であるため，ポライトネスへの強い傾向がみられるというのである。ポライトネスは力の差，社会的距離の度合いなどの違いの認識にもとづき，変化させることなしにそれら（差）を再生産する方向に向かうとみるわけである。

CDA でも CLS でも「批判的（critical）」という語は，分析に当たって社会に存在する不平等の力関係により抑圧されている人々の立場から，人々から隠されているような結びつき（connections），つまり，言語，権力，イディオロギーの関係を明らかにする，という意味で使われる。つまり，CLS は社会的相互作用をその言語要素に焦点をあてて分析し，また社会的関係のシステムにおける概して隠れた決定要因をそのシステムに及ぼす隠れた影響と共にあぶりだすという方法をとる（Fairclaugh 2001: 4）。CLS は（Bourdieu と同様）弱者の立場にたつ社会主義的イディオロギーを前面にだす分析態度を明確にしているが，「慣習行動の共同体」モデルにもとづく Mills（2003: 242f）は，そうした個人の言語使用が固定観念的な力＝権力と抑圧といったものと相関関係をもつとする見方はとらず，互いに対立する CA と CLS の行きかたに対する批判とともに，こうした特定のイディオロギーにたつアプローチと「共同体の慣習行動」のモデルは異なることを明確にしている。こうした意味で，「言説的アプローチ」と CDA や CLS との関係はいくらか共通点をもちながらも，分析者のイディオロギーの果たす役割などの点で少なからぬ相違があることになる。

5．要約と今後の展望

以上，代表的なモデルやアプローチの紹介を通じて，複雑なポライトネ

ス現象を反映するかのように錯綜してみえなくもない多様な理論やモデルの論争の所以とその問題点をある程度整理しながら検討してきた。本論では，膨大なポライトネス研究の包括的概観はどのみち不可能であるため，重要と思われる一部のモデルを取りあげたにすぎないが，それでも議論の重複が避けられなかったことは認めなくてはならない[15)]。ここでとりあげたアプローチやモデル以外にも注目すべきものがあることは疑いないが，持続的な影響力をもつモデルやアプローチの主要なものを概観することでポライトネス研究の現状の大まかな輪郭は描くことができたと思われる。

本稿ではまず語用論研究の黎明期から 1980 年代の発展期にかけて提案された「合理主義的アプローチ」ないし「Grice-Goffman パラダイム（Held 2005: 131）」と総称されるモデルの「範型」たる B&L（1978/1987）を中心に，Grice の CP を意識した他のアプローチやモデルを検討し，ついでその影響力に見合うかのような多様な批判や対抗モデルのいくつかに触れたあと，近年の顕著な研究動向を代表するポストモダン的言説的アプローチを代表する Eelen（2001），Watts（1992/2005，2003），Mills（2003）の基本的立場を跡づけ，ポライトネスをめぐる論争の性質と各アプローチやモデルの基本的主張と妥当性を考察した。すなわち，2 つに大別される主要アプローチのうち，ポライトネスを相互作用における「方略的摩擦回避」または Grice の CP（合理主義的効率）から逸脱する主因としての「フェイス侵害補償行動」とみる立場では，ポライトネス行動とはなにより相手のフェイスに対する配慮を示す多様な（しかし大部分は無意識の）方略や公理を通じて行なう補償・緩和行動とみる。そこではフェイスと方略に文化的変異があることを認めると同時に，言語的相互作用にみられる普遍性が追求される。一方，「言説的アプローチ」では，ポライトネスという「合意のない」「普遍性に欠ける」抽象的概念をトップダウン的に想定することを避けて，ポライトネスをより広く社会的慣習行動の理論の一部とみなして，一般の人々がポライトネスに関連する概念や言語行動において相互の言動を判断し評価する「言説による論争」の様相とその背後にある facework を包含する関係作業（relational work），すなわち politeness1 という一般レベ

ルの言語行動を自然談話の相互作用の観察・分析を通じてまず解明することが先決だとする。理論としての politeness2 のレベルはそれをもとに構築すべき作業だとみる。合理主義的アプローチの自然科学流のトップダウン型，演繹的，還元主義的方法論に代わって，ポライトネスの社会学的諸相を自然談話にみられる日常的な相互作用（慣習行動）のダイナミズムにおいてボトムアップ的，非還元主義的に捉える研究方略を提唱していることをみた。ただし，言説的アプローチの B&L 批判には妥当と思われるものもあるが，フェイスの社会的側面を無視して個人性や方略の意思性，意識性を強調したり，文化差の配慮を無視するなどいささか正当性に欠けるものがあることも指摘した。

「言説的アプローチ」の研究プログラムは，B&L (1987) など既存の理論がもつとされる「3 つの概念上の偏向（Eelen 2001: 119）」を是正する研究―すなわち，politeness と impoliteness の両面を扱い，聞き手の評価を考慮し，行動の評価をも考慮する方法―をめざす。一般の人の慣習行動(practice) における「主観的で倫理的」評価が入りこむ現実的なポライトネス（= politeness1）の解明を当面の目標とするが，ポライトネスが文化を横断する人の相互作用における客観的概念にまで高められるとすれば，ポライトネス行動のそうしたごく現実的な認識のしかたを説明できるモデルは現行の理論にはないと断じ，それが可能なのはポストモダニズムの言説的アプローチだとしてパラダイム・シフトを標榜するわけである（Watts　2003: 252)。

今後の展望を現時点で示すことはいささか無謀だが，B&L のモデルがこれほど多くの批判を長期間にわたり受けながら「範型」としての地位を依然として保っているようにみえることは，欧米の多くの語用論や社会言語学の概説書でも B&L のポライトネス観や基本概念がまず取り上げられている事実からも伺える。それは B&L のアプローチが問題点を抱えながらも「明示性や簡潔性や予測性などの点で経験的理論の基準を満たす唯一のアプローチ（Kasper 1998: 679）」であるばかりではなく，フェイスという概念や方略の選択に還元するそのポライトネス観がある意味でこの問題

の本質をつく説得力をもつからだと考えられる。ただし，B&L にも，とくにポライトネスが（CP の違反によって伝わる）推意によって伝達されるものか，あるいは社会的規範のように，違反があるまで意識されないものかどうかというモデルの根幹にかかわる問題を含め，ポライトネスの原則や公理の位置づけの問題や方略と概念の位置づけ，あるいはフェイスの普遍性と個別文化性の問題，フェイス侵害度の算定に関する問題など，今後とも論議すべき問題点が残されていることは疑いない（Fraser 2005: 80）。普遍的モデルをめざす合理主義的アプローチでは，こうした批判や問題点に応えるとともに，複雑な相互作用や談話の諸相のマクロ的視点からの観察を通じて，個人の慣習行動に与える集団や共同体に共通の「規範」による圧力や影響をもとりこむ視点が求められるであろう。一方，言説的アプローチは，現時点ではまだモデルとしての具体性や簡潔性に乏しいが，まさに人々の相互行為の「言説」を対象とするフィールドワーク重視の革新的な社会学的モデルとして評価すべきであろう。しかし，B&L に代わる「範型」になるためには，Watts が自ら問題提起しているように，politeness1/politeness2，politic/polite behaviour などの鍵概念のより精密で説得性のある定義が求められるほか，特定の社会集団・共同体を超えた普遍性をもつモデルとして不可欠な明示性や簡潔性が課題となるであろう。

いずれにせよ，合理主義的対言説的アプローチの間にはなにより方法論的に埋めようのない大きな隔たりがあり，当面はこの 2 つのアプローチによる研究路線が並行していくものと思われる。

〈注〉

1）Eelen は，B&L（1987：84）が，社会行動の構築の背後にある原則の記述を目指すとして，「Durkheim，Parsons，Weber ら主要な社会理論には満足すべき行為の理論（a satisfactory theory of action）が欠けている」と述べていることを見落としていると思われる。

2）habitus（ハビトゥス）とは，個人が成長し社会化していく過程で種々の社会的条件のもとで内面化した行動や知覚，認識のしかたやそれにもとづく行動様式をもたらす一連の習慣，傾向，性向のようなものを総合的に指す。

Bourdieu 自身のより細かい定義は分かりにくいが，Bourdieu（1977）の編者・訳者である R. Nice のより分かりやすい解説では「行為者がある仕方で行動し，反応するように仕向ける一連の性向（dispositions）である（Bourdieu 1977: 12）」。ここで性向というのは，「〝規則〟によって意識的に調整されたり支配されたりすることなしに〝規則的〟であるような慣習行動（practice），知覚（perceptions）及び態度（attitudes）を生み出す（Ibid.）」ものであり，habitus を構成する dispositions は繰り返し教え込まれ，構造化され，持続可能で，生成的であり，置き換えることができる（Ibid.）とされる。なお，〝habitus〟や〝disposition〟に関するより詳しい議論は 4.5 節を参照されたい。後者については注 10 も参照。

3）〝emergent social networks〟とは，「社会的・コミュニケーション的な相互作用の過程でつくられる個人間の社会的結びつきのネットワーク（Watts 2003: 274）」を意味する。

4）〝politic behavior〟という語句は，Kasper（1990：208）でも使われているが，Watts の位置づけとは異なる。

5）Watts の言う〝discursive struggle〟とは「ことばのやりとりにおいてある用語（term）がどういう意味かに関して参加者各人の意見が一致しないこと」を指す（Watts 2003: 274）。

6）「関係作業（relational work）」とは，「個人が他人との関係をうまくさばくために傾ける努力（the work individuals invest in negotiating relationships with others（Locher & Watts 2007: 10））」をいう。

7）Watts（2003：262）は politeness1 の概念化が経験的研究においてどのように用いられるかの大まかな見通しに触れてはいるが，上で上げた談話例を含む自然談話の分析におけるように文字通り「言説的」な解説を超えた一般化には踏み込んでいないようにみえる。

8）Mills の〝community of practice〟は，いわゆる Community of Practice（CoP）理論（特定の専門家や仕事集団の間での仕事や知識を向上させる目的でつくられる非公式的ネットワーク）での概念を大幅に修正した「談話のレベルにより多く関わる，話し手とその共同体との関係のモデル」という独自の概念規定で使っている（Mills 2003: 3f）。

9）Mills の B&L（1987）批判は基本的には Watts らの批判と同様のものであるが，その詳細については，Mills（2003: 59f）を参照。

10）〝disposition〟（仏語）は英語でも disposition と訳され，Bourdieu（1977）の注記では，フランス語は英語より広い意味範囲を指すとして，「組織化する

行為の結果（the result of organizing action）で structure の意味に近いこと，また存在のあり方，習慣的状態（a way of being, a habitual state），とくに性向，傾向（predisiposition, tendency, propensity or inclination）を意味する」とあり，英語版の訳者（R. Nice）は英仏語の意味を同義とみなすのが適切だとする（Bourdieu 1977: 214）。山本（2007：106）は，「『性向』，『行動傾向』と訳されうるが，わたしは，『配置変え』という意味訳で考える。すでに構造化されてあるものを，その枠をこわさずに内部で，本棚の本を入れかえるように配置変えするという意味である」と述べている。本稿では便宜的に「性向」としておく。

11）practice は仏語の〝pratique〟の訳語であり，日本語では「実践＝慣習的行動」（ブルデュー，稲賀訳 1993：62）や「プラチック（実際行為）」（山本 2007：21）などの訳語が与えられている。文脈によっては「実践」をも意味するが，本稿では，便宜的に「慣習行動」としておく。

12）ここでいう〝capital〟とは，「個人の habitus の一部となるさまざまな資源をとりこんだもの（Ibid.: 273）」である。なお，Bourdieu は capital を社会的資本，文化的資本及び象徴的資本に拡大しているが，さらに「言語資本（linguistic capital）」という表現も使われる。たとえば，以下の引用を参照：「（社会における）支配的な言語能力が，その他の［言語］能力との関係において弁別的利潤を保障するような言語資本として機能するのは，この支配的言語能力を所有するグループ［＝いわゆる標準語を使う社会の支配階級］がその支配的言語能力のみを正統なものとして，公の市場（社交界市場，就学市場，政治市場，行政市場などの市場）やかれらが関与している大部分の言語的相互行為のなかで強制できるのに必要な諸条件（中略）が恒常的に満たされている限りにおいて，なのである（Bourdieu 1991: 56，ブルデュー，稲賀訳，55 頁，（稲賀訳を大幅に変え，［　］部分は筆者追加）」。

13）RT の「関連性（relevance）」とは「少ない認知的努力（労力）で相対的に大きな認知効果を与える」ということであり，Grice の公理における関連性の意味よりも大幅に拡張・修正されている。RT では発話の意図を解釈する人間の認知が生得的にもっている特性は，自分に関連性のある（ようにみえる）情報にまず注意を払うことだと仮定する。伝達（厳密には「顕示的伝達」）とは，相手に注意をうながす行為であり，それによって関連性の期待がつくられ，それに基づいて，意図された解釈を認識するための仮説と評価の過程をへて推論が行なわれる。発話の解釈にはさまざまな想定（assumptions）が重要な役割を果たすが，関連性とはいわばコスト（費用＝労力）対利益の関係

に関する概念であり，聞き手が発話に耳を傾ける際に期待する認知的利益は，聞き手がもつ世界に関する既存の想定の修正であり，認知的コストとはその修正をもたらすのに必要な労力だとみるわけである。要するに，聞き手は最小のコスト（解釈に要する労力）で最大の認知効果を達成するために，最適の関連性をもつ情報に注意を集中して話者が意図した解釈を選択する，とみるのである。こうした関連性の原則は，伝達者と聞き手が「従う」ものでなく，例外なく適用されるものである。関連性理論は言語理解の認知的過程に議論を限定しているため，コミュニケーションの社会的側面や談話を（少なくとも明示的には）扱わないという批判があるが，反論もある（Haugh 2003: 405 参照）。

14）「認知環境（cognitive environment）」とは当人が利用できる想定の集合（“a set of assumptions available to him”）（S & W: 46），つまりその人がもつ諸々の知識や想定である。またコミュニケーションによって互いに影響を及ぼす個人の文脈効果は「認知効果（cognitive effect）」と呼ばれ，個人の信念や想定が変わることをいう（S & W 1995: 265）。

15）本論文の前篇でも述べたことだが，多岐にわたるポライトネス現象は学際的アプローチでしか包括的にとられられないと思われる。年々増大する膨大な量のポライトネス研究に関する公平な包括的概観は筆者個人の能力をはるかに超えるものである。また第三節で触れたように，欧米におけるポライトネス研究の簡便な概観としては，古くは Fraser（1990）と Kasper（1990）があり，また Held（1992/2005）も独特の視点から前二者が扱わない研究アプローチを扱った概観として価値がある。比較的新しい Kasper（1998）も多様な状況の手際のよい要約である。Eelen（2001）と Watts（2003）は，それぞれの理論的立場は別として，それまでの主要なポライトネス研究のモデルやアプローチの詳細な概説と批判としても貴重である。最近の Fraser（2005）は，B&L 批判のまとめとして貴重であるが，発表時期からすれば，言説的アプローチへの言及がほとんどないのはやや奇異に感じられる。Leech（2007）は overview ではないが，やはり言説的アプローチを扱っていない。

References*

Arndt, H. and Janney, R.W. 1991. Verbal, prosodic, and kinesic emotive contrasts in speech. *Journal of Pragmatics* 15: 521–549.

Austin, J.L. 1962. *How to Do Things With Words*. Oxford: Oxford University

Press.

Bargiela-Chiappini, F. 2003. Face and politeness: New (insights) for old (concepts). *Journal of Pragmatics* 35: 1453-1469.

Blum-Kulka, S. 1992. The metapragmatics of politeness in Israeli society. Watts et al (1992): 255: 280.

Bourdieu, P. (R. Nice, trans.) 1977. *Outline of a Theory of Practice*. Cambridge: Cambridge University Press.

_____. 1991. (G. Raymond & M. Adamson, trans. edited and introduced by J.B. Thompson) *Language and Symbolic Power*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

P. ブルデュー，稲賀繁美 (訳) 1993.『話すということ ── 言語的交換のエコノミー ──』東京：藤原書店.

Brown, P. & Levinson, S. 1987. *Politeness—Some Universals in Language Usage*. Cambridge Univ. Press.

Burt, S. 2006. Review of Lakoff & Ide (2005). LINGUIST List 17.1235 (http://www.linguistlist.org/issues/17/17-1235.html)

De Kadt, E. 1998. The concept of face and its applicability to the Zulu language. *Journal of Pragmatics* 29: 173-91.

Eelen, G. 2001. *A Critique of Politeness Theories*. Manchester: St. Jerome Publishing.

Fairclough, N. 2001. *Language and Power*. 2nd edition. Harlow: Pearson Education.

Fraser, B. 1975. The concept of politeness. Paper presented at the 1975 NWAVE meeting. Georgetown University.

Fraser, B. 1990. Perspectives on politeness. *Journal of Pragmatics* 14: 219-236.

Fraser, B. & Nolen, W. 1981. The association of deference with linguistic form. *International Journal of the Sociology of Language* 27: 93-109.

Fraser, B. 2005. Whither Politeness. Lakoff & Ide (2005): 65-83.

Goffman, E. 1967. *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*. New York: Pentheon Books.

Green, Georgia. 1996. *Pragmatics and Natural Language Understanding*. 2nd ed. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Grice, H.P. 1975. Logic and Conversation. Cole, P. & Morgan, J., eds., *Syntax*

and Semantics 3: Speech Acts. (Academic Press) Also in Grice 1989.

_____. 1989. *Studies in the Way of Words*. Harvard Univ. Press.

Gu, Y. 1990. Politeness phenomena in modern Chinese. *Journal of Pragmatics* 14(2): 237-57.

Gumperz, J. 1982. *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

Haugh, M. 2003. Anticipated versus inferred politeness. *Multilingua* 22, 397-413.

Haugh, M. 2006. Review: Pragmatics: Watts et al. (2005). LINGUIST List 17. 1897. http://www.linguislist.org/issues/17/17-1897.html

Held, G. 2005 (1992). Politeness in linguistic research. Watts et al. 2005 (1992): 131-153.

Hill, B., Ide, S., Ikuta, S., Kawasaki, A., and Ogino, T. 1986. Universals of linguistic politeness: Quantitative evidence from Japanese and American English. *Journal of Pragmatics* 10: 347-371.

彭　国躍．1999．中国語に敬語が少ないのはなぜ？『月刊言語』第 28 巻 11 号：60-63．

Ide, S. 1989. Formal forms and discernment: Two neglected aspects of linguistic politeness. *Multilingua* 8-2/3: 223-248.

Ide, S. et al. 1992. The concept of politeness: an empirical study of American English and Japanese. Watts et al. 1992/2005: 281-97.

井出祥子．2006．『わきまえの語用論』東京：大修館．

Janney, R. & Arndt, H. 1992, 2005. Intracultural tact versus intercultural tact. Watts et al. 1992/2005: 21-41.

Kasper, G. 1990. Linguistic politeness: Current research issues. *Journal of Pragmatics* 14: 193-218.

Kasper, G. 1998. Politeness. Mey, J. 1998: 677-684.

Kasher, A. 1986. Politeness and rationality. J.D. Johansen, H. Sonne, H. Haberlad (eds.) *Pragmatics and Linguistics*. Festschrift for J.L. Mey. Odense: Odense University Press.

Lakoff, R. 1973. The Logic of Politeness: Or Minding your P's and Q's. C. Corum, T.C. Smith-Stark, and A. Weiser, eds., *Papers from the Ninth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*: 292-305. (Chicago Linguist-ic Society)

_____. 1977. What you can do with words: politeness, pragmatics, and

performatives. Rogers, P. et al (eds.) 1977. *Proceedings of the Texas Conference on Pragmatics, Presuppositions and Implicatures*. Center for Applied Linguistics.

_____. 1979. Stylistic stragegies within a grammar of style. Orasanu, J., Slater, K. and Adler, I. (eds.) *Language, Sex and Gender: Does la difference make a difference?*, New York: The Annals of the New York Academy of Sciences, 53-80.

Lakoff, R. 1989. The limits of politeness: Therapeutic and courtroom discourse. *Multilingua* 8: 101-129.

Lakoff, R. & Ide, S., eds. 2005. *Broadening the Horizons of Linguistic Politeness*. Amsterdam: John Benjamins.

Leech, G. 1980. *Explorations in Semantics and Pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins.

Leech, G. 1980. Language and tact. Leech (1980), pp. 79-117.

Leech, G. 1983. *Principles of Pragmatics*. London: Longman.

Leech, G. 2007. Politeness: Is there an East-West divide? *Journal of Politeness Research* 3-5: 167-206.

Levinson, S. 2000. *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge, MA: MIT Press.

Mao, L.R. 1994. Beyond politeness theory: "face" revisited and renewed. *Journal of Pragmatics* 21(5): 451-86.

Mey, J. (ed.) 1998. *Concise Encyclopedia of Pragmatics*. Amsterdam: Elsevier.

Mills, S. 2003. *Gender and Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.

O'Driscoll, J. 1996. About face: a defence and elaboration of universal dualism. *Journal of Pragmatics* 25: 1-32.

Pike, K. 1967. *Language in Relation to a Unified Theory of the Structure of Human Behavior*. 2nd ed. The Hague: Mouton.

Recanati, F. 2004. *Literal Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.

Searle, J. 1969. *Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press.

Sifianou, M. 1992. *Politeness Phenomena in England and Greece*. Oxford: Clarendon.

Sifianou, M. 2006. Review of Watts (2003). *Language* 82-3: 665-668.

滝浦真人．2005．『日本の敬語論 ── ポライトネス理論からの再検討』東京：大修館．

Thomas, J. 1995. *Meaning in Interaction: An Introduction to Pragmatics*. London: Longman.

Thompson, J.B. 1991. Editor's Introduction to Bourdieu (1991): 1-31.

宇佐美まゆみ．2002．「ポライトネス理論の展開」1 ～12，『月刊言語』第 31 巻第 1 号， 5 号， 7 号，13 号．東京：大修館書店．

Van Dijk, T.A. 2001. Critical Discourse Analysis. Schiffrin, et al. (eds.) *The Handbook of Discourse Analysis*, Blackwell: 352-371

Vilkki, L. 2006. Politeness, face and facework: Current issues. *A Man of Measure: Festschrift in Honour of Fred Karlsson on his 60th Birthday. A Special supplement to SKY Journal of Linguistics*, Vol. 19: 322-332.

Watts, R. 2003. *Politeness*. Cambridge: Cambridge University Press.

Watts, R., Ide, S., & Ehlich, K. (eds.) 1992/2005. *Politeness in Language: Studies in its history, theory and practice*. 2nd revised and expanded edition with a new introduction by Richard J. Watts. Berlin: Mouton de Gruyter.

Watts, R. 2005. Linguistic politeness research: *Quo Vadis*? Watts et al. (2005), xi-xlvii.

Werkhofer, K. 1992 (2005). Traditional and modern views: The social constitution and power of politeness. Watts et al. 1992/2005: 155-99.

White, M. 2005. Review of Watts (2003) *CJS Online* January-February 2005.

Xie, C. 2007. Controversies about politeness. Dascal, M. and Chang, H. *Traditions of Controversy*. Amsterdam: John Benjamins Publishing, 249-266.

*この参考文献表は便宜的に本論文の前篇のものに後編で参照した文献を追加したものである。